

県議会議員

あらい、絹世の「磯っ子」レポート

県政をもっと身近に



<http://www.arainuyoy.jp>

「長期化」「対策の遅れ」など浮き彫り 県が「ひきこもり」について初の調査

いじめや不登校、高齢化や介護などとともに若年層を中心とした「ひきこもり」が社会問題としてクローズアップされるようになってきているなか、神奈川県では昨年11月から今年1月にかけて「ひきこもりの現状と支援に関する」初の調査を行い、先ごろ、結果を公表しました。この中では、「ひきこもり期間が5年以上」が約5割、「40代以上」が約3割に上るなど長期化・高齢化が進んでおり、支援機関間の連携が不十分であったり、家族が相談しやすくする態勢づくりが必要など対策の遅れが浮き彫りになっています。県では「家族への相談機関周知の浸透を図るなど対策の改善に役立てたい」としています。

「ひきこもり」は「さまざまな要因の結果として社会参加を回避し、原則的には6カ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態」を指すと定義されています。国では今春、初めて40歳以上も含めた調査結果を公表しましたが、該当者は計115万人でこのうち61万人が40～64歳としています。これらは5000人の抽出調査によるもので実数は不明です。県の調査も県内のひきこもり相談機関、市町村社会福祉協議会、地域包括支援センターなど関係機関558カ所を対象に調査票をやり取りし、257カ所から得た回答を基に推計したもので、実数は不明ですが、傾向が浮き彫りにされたものとなっています。対象は15～64歳で、18項目のアンケートと自由意見からなっています。

この中で「ひきこもりとなったきっかけ(複数回答あり)」では「不登校374件(37%)」「精神的な疾病またはその疑い370件(36%)」「人間関係がうまくいかなかった348件(34%)」「職場になじめなかった226件(22%)」が多く、学校生活のころからの対応が重要であると感じさせるものとなっています。「ひきこもり状態になってからの期間」(回答2044件)では、最も多いのが「6カ月から1年未満」225件ですが、「10年から15年未満」128件など5年以上が約5割となっており、長期化していることがうかがえます。年齢別では40～64歳の割合が28.5%を占めていました。一方の対応ですが、「ひきこもり状態になってから初めて相談するまでの期間」では2044件の回答中「6カ月から1年未満」が227件で、不明・未回答が891件と多くありました。「支援において連携した機関(複数回答あり)」では「連携した機関等なし」が663件あり、体制が整っていないことを浮き彫りにしています。県では対策としてまず、支援・相談機関の存在をしっかりと知ってもらえるようにする取り組みを始めたいとしています。



コレが言いたい!

現在、ひきこもりの相談支援体制は、30歳代までの若年層を中心に行われています。ひきこもりの長期化により、本人と両親が高齢化し、支援につながらないまま孤立することが問題となっている事から、平成29年12月の第三回定例会の代表質問により、この度「ひきこもりに関する実態調査」が実施されました。調査結果からも分かる様に相談・支援機関の存在を知ってもらう事や様々な機関が連携して支援を行う必要があります。

今月のひと言

来年開催される東京2020オリンピック競技大会のセーリング競技のプレ大会である「セーリングワールドカップシリーズ2019」が8月25日から9月1日まで、江ノ島ヨットハーバーで行われます。昨年行われた「セーリングワールドカップシリーズ江ノ島大会2018」では20,000人の人が訪れた事から、今年も盛り上がる事が期待されます。

磯子あれ? これ?



大聖院本堂の「外陣天井画」(PART3)

奥田元宋画伯が描いた「赤龍」の天井画の周りには、総勢 25 人の門下が故人を偲び、四季折々の花を描きました。

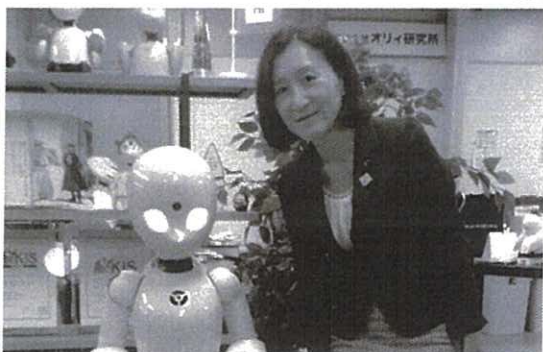
その中には、故能島康明【大正 4 年 3 月生～平成 2 年 3 月没】(曼珠沙華・梅・藤)、康明氏の息子和明(桔梗・竹・アネモネ)、同弟千秋(水仙)3 画伯の作品も奉納されています。

能島康明氏は、宮城県出身の日本画家で宮城県の自然や風景を題材とした作品が多く知られています。また、永年に渡り東北画壇の発展と後進の育成が評価され、平成 9(1997)年に河北文化賞を受賞しました。長男の和明氏は、大学在学中に最年少で日展に初入選し、日本芸術院賞も受賞。

平成 29(2017)年、宮城県栗原市にある康明氏の自宅の画室で同氏にしては珍しい女性の幽霊の絵がみつかりました。その後、親交のある地元の通大寺に寄贈され毎年お盆に合わせて公開されています。

そのほか、門弟でデヴィ夫人や著名人を描くなど人物画を得意とする市丸節子氏=昭和 3 年生れ=の作品(水蓮・沙羅・山茶花)も奉納されています。

活動報告



オリ研究所の OriHime-D(オリヒメディー)。遠隔で接客やものを運ぶなど、身体労働を伴う業務を可能にする、全長約 120cm の分身ロボットです。



7月23日(火)、委員長を務める厚生常任委員会
で東京都港区の「(株)オリ研究所」「(公財)日本財
団の電話リレーサービス」の視察を行いました。オ
リ研究所では、孤独の問題を解決するツールとし
て分身ロボット「OriHime(オリヒメ)」を開発し、入
院や身体障害などによる「移動の制約」を克服し、
「その場にいる」ようなコミュニケーションを実現す
るなど、テクノロジーによって「できない」を「でき
る」に変えています。電話リレーサービスは、聴覚障
害者と電話の相手先である健聴者との間を、リレ
ーサービスセンターにいるオペレーターが、文字や手
話で通訳することにより、リアルタイムでつなぐ
サービスで、(公財)日本財団が、制度化を目指して
モデルプロジェクトを実施しています。

あらい絹世 プロフィール

- 昭和43年3月8日 横浜市磯子区生まれ
- 平成31年4月 県議会議員3期目当選
- 横浜雙葉小・中・高等学校卒業
- 厚生常任委員会委員長
- 明治学院大学社会学部社会福祉学科卒業
- 議会改革検討会議委員
- 日商岩井(株) / (株)メタルワン
- ランドデザイン調査特別委員会委員
- 自民党かながわ政治大学12期生
- かながわ自民党女性議員局長